

戦争の記憶を繋ぐ

— 未来へ伝える平和の尊さ



▲今月号の特集でインタビュー(5ページ)をした堤忠久さんの父・政年さんの出征にあたり、自宅近くで家族と撮影したもの。前列左から2人目の男の子が堤忠久さん、写真中央の軍服姿のかたが政年さん

今年、戦後70年

終戦から70年。すでに日本全体では戦後生まれの人口は8割を越え、先の大戦も『歴史』の一部となりかねなくなっています。

日本が豊かになり、戦争の記憶も薄らいでいくにつれて、私たちは、今の平和な日本を当然のものだと考えてしまいがちです。

しかし、いま私たちが受けているこの豊かさは、戦争を経験した

先人の耐え難い苦労の上にあったことを忘れてはなりません。

当時の様子を知る手段は確実に少なくなっています。

特に当時戦争を体験したかたが、その時何を思いながら、戦争という極限状態を生きてきたのかを伺う貴重な機会は減っています。

二度と戦争を繰り返さないよう、平和の尊さや命の大切さを次世代に伝えていかなければなりません。

これから私たちができることは、体験者の皆さんの言葉を『繋ぐ』ことなのではないでしょうか。過去から学び、未来に生かしていくことが、今を生きる私たちの務めといえます。

戦争が終わり、70年がたつとすると今だからこそ、もう一度平和について考えてみませんか。

先の大戦が終わり70年目を迎えようとしている今日。私たちは、穏やかな日常を送ることができません。しかし、この平和な日常は戦争を経験した多くかたの犠牲の上にあることを忘れてはいけません。一人ひとりが、あの戦争の事実を知り、伝え、生きていく。それが平和な世界をつくる一歩になるのではないのでしょうか。今月号の特集では戦争を実際に体験されたかたにお話しをお聞きしました。もう一度、皆さんも『平和』について考えるきっかけとしてみませんか。

体験が伝える戦争

終戦前夜の昭和20年8月14日深夜から翌15日未明にかけて米軍が埼玉県北部を中心に爆撃しました。そして、県内では最多の266人という尊い命が失われました。

市内にお住まいの金子愛子さんは、その爆撃の中心地にいたかたの一人です。

当時金子さんは、熊谷市に家があり、戦争の激化とともに市外へ疎開していました。しかし、8月14日に家財道具を取りに帰るため、家に幼い子どもを連れて戻っていました。

その日の夜、突然の空襲がまちを襲いました。空から焼夷弾が降り注ぐ中、金子さんは子どもを背負い、防空壕まで逃げました。

「爆弾の音が止んだあと、防空壕の外に出てみると、見渡す限り全滅といっていいくらいに、ひどい有様でした。川に飛び込んで逃げ切れずに、亡くなっている人もたくさんいました。」

金子さんの脳裏には、70年たった今でも、悲惨な情景がはっきりと焼き付いています。

※金子さんのインタビューは4ページに掲載

戦後70年。もう一度『平和』について考えてみませんか

深谷市戦没者追悼式

福祉政策課 (0568-5041)

市では先の大戦で亡くなられたかたを追悼するため、戦没者追悼式を執り行っています。参加は自由ですので、遺族のかた以外もこの機会にぜひご参加ください。

とき ● 10月21日(水)午後1時30分～(午後1時開場)

ところ ● 深谷市民文化会館大ホール



▲毎年深谷市では戦没者の追悼のため戦没者追悼式を行っています

非核平和推進事業

映画『少年H』無料上映会

秘書課 (0574-66031)

戦後70年がたち、日本では平和が当たり前となつていきます。映画を通じて、平和や命の尊さを見詰め直してみませんか。

とき ● 8月1日(土)午前10時～(開場 午前9時30分)

ところ ● 深谷市民文化会館大ホール



※入場整理券はありません。自由にご覧ください。 ※席と駐車場には限りがあります。



金子愛子さん
(本住町)

大正3年生まれ。戦争当時は熊谷に住み、戦争の激化に伴い、北吉見村に疎開。昭和20年3月9日、金子さんが31歳の時に夫・治太良さんを戦地に送る。また戦争末期に熊谷を襲った『熊谷空襲』を経験する。夫の戦死公報を受け取ってからは一家の柱として、洋裁や育すう（ニワトリのヒナを育てる仕事）に励み、女手ひとつで2人の子どもを育てる。

戦後70年 風化させない『戦争の記憶』
夫から愛する家族へ

最後のメッセージ

が届いてからほんの2、3日出征をしなければならなかったのです。本当に慌ただしかったことを今でも覚えています。

夫を送り出した後、夫の部屋には1枚の手紙が残されていました。

家族に宛てた最後の言葉

手紙は夫の『遺書』でした。これから死地に向かう夫が、私たち遺される家族を想って書いてくれたものです。

その中には、『何んの心配も無く征ける我は美に幸福だと思ふ』

夫・治太良の召集

私は戦争当時、夫と子ども2人、夫の母と熊谷で暮らしていました。北吉見村（現在の吉見町）に疎開をしていました。当時は物も少ない時代だったものですから、何から何まで本当に不便な生活でした。それでも家族5人仲良く生活していました。夫・治太良に召集令状が届いて大きく変わりました。それは本当に突然のことでした。今になって思うと、戦争末期だったからなのでしょうが、令状

出征直前の金子治太良さん



▲金子愛子さんの夫・治太良さん
出征直前の当時33歳の時の写真。愛子さんの兄が経営する醤油店で働いていたが、昭和20年、戦争の激化に伴い召集された

戦後70年 風化させない『戦争の記憶』
子どもの不幸、親の不幸
戦争がもたらす悲しみ

父の見送りをするじいじがいきなかつた

父は私が6歳の時に出征しました。父との最後の会話は、出征前日でした。私を抱いて、「明日から兵隊に行ってくるから、おじいちゃんとおばあちゃん、母ちゃんの言うことを聞いていい子になるんだよ。来年学校に上がったらよく勉強するんだよ。」と話したのが最後でした。

翌日父は、榎山神社で大勢の人に見送られて出征していきましたが、私自身は見送りに参加することはできませんでした。

父は叔母に『みんなの前でしっかりとおいさつが出来なくなってしまうから、忠久を俺の見えるところに立たないでくれ。』と話していたそうです。出征の時のあいさつで泣いてしまい、家の者が笑われるようなことがあってはならないと考え、そのようにしたと聞いています。

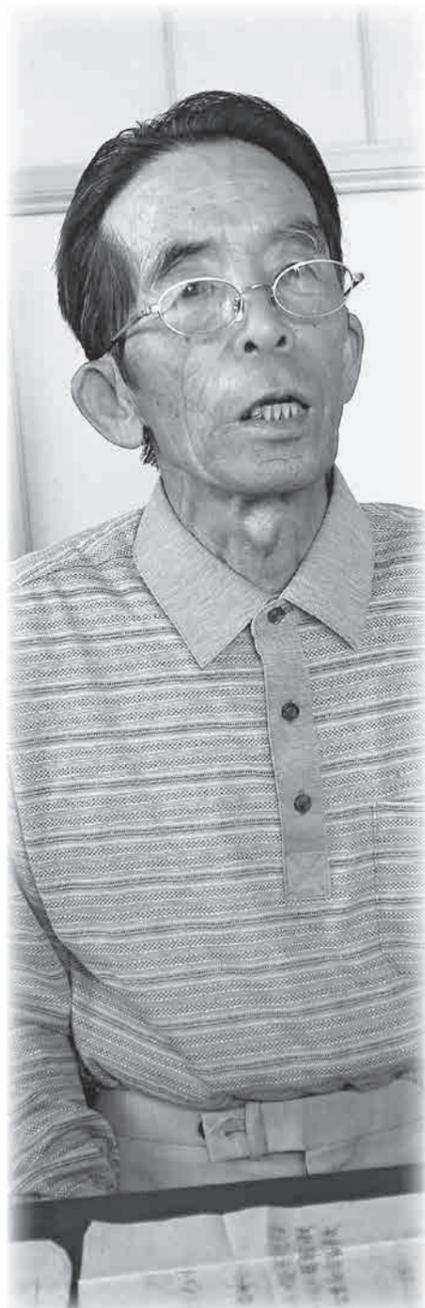
戦争が引き裂く家族の絆

私は、6歳という幼さで父と最期の別れをいたしました。そ

私はというと、そんな事情なんかわからなかったものですから、泣きじゃくりながら私を留める叔母を困らせていました。その時の父の気持ちかわかるようになってからは、より悲しみが深くなりました。今当時の事を思い出してもとてもつらく思います。

戦死の知らせが届いたのは出征から9カ月経ってからのことでした。『名譽の戦死』と書いてありましたが家族にとっては、死亡の知らせでしかないですよ。

んな経験をした分、特に親子関係の重要さを人一倍感じ、生きてきました。幼い子どもを置いて、早くに親が死んでしまつたということは、子どもにとっては一番頼りにしている人を失つこと、親にとっては一番楽しみな、子どもの成長を見ることができないことなんです。父は、親にとって一番の楽しみである子どもの成長を見ることがなくなつたり、私は頼りにしていた優しい父を失いました。否応なく親子の絆を引き裂いてしまつたのが戦争でした。これからの子どもたちには、私たちがしたような苦勞を決してさせたくありません。



堤 忠久さん
(原郷)

昭和12年生まれ。4人兄弟の長男として生まれる。父・政年さんは昭和18年9月12日、堤さんが6歳の時に入隊。輜重隊（しちょうたい）という食糧や武器などを輸送する部隊に配属されたが、9カ月後に中国湖南省で物資の輸送中に戦死する。小学校6年生の頃から家業の農業を手伝い、父親がいなくなってしまった一家の生活を支えた。